

右總首數都合三千七百二十六 奉行在判

判官、大將ももは首をも其ま其外ハ悉鼻よして遠石灰を以て
 壺に結入南原五十余丁の僧園を記し言上目録に相添て日本
 一進上までウレに在せし奉行内藏元右馬介主馬首三人書状
 伊豆も民部大捕飛彈も南原の陣所よりと書止る伊藤氏
 部大捕輝も出雲も腋坂中勢女捕も後し伊豆も腋坂も向て
 云々言上の旨一將軍公奉命追釜山海持兼有て杉
 原下野も山口玄蕃元を以て指上るも落城の仕合ハ口上りて言
 上者一と云はれ右三人并營三郎兵衛尉同を以て八節日本書
 事と言上目録頭數も清れ十六日の夜小入亥の刻の三番貝小南

原を立てウレの湊も諸將十七日あら南原小逗留一城と毀
 あり十六日言上目録記て後一吉一番衆の五人を召出大小感収
 有て渡海十六万騎の先切一其上右將を討て事予が面目何と
 うきよめんやとて松と養美を下り大河内ハ其上小馬共餘
 多引奇毛付して云々とあり大河内馬を陣領し大慶身り
 案で破るは五指の痛とも舟と髪髪を以て馬の毛を切り鞆
 せ兼て見よ新近藤も在り尉参りゆ道の矢の根を抜給ふや
 と問大河内未抜ぐべと云々近藤疵口遠く抜ぬべしと云せむ
 抜ぬと云へば大河内より右の腰の疵ハ毛引ぐをわ
 たすて巻て指入矢の根と云ふと換て其毛引を船治の大捷す

一とくも朝鮮大明までも名高き王計討死し物の数ふあ
 らねども基も共々彼地ふ於て討干はく時々味方の競はるる
 一そふく湯吉事小無しゆは抑帝都を廻廻し川面三十余町
 の大川ありと聞いし厚くも時既上寒し此寒天ふ向て出老ハ
 横帯をひひし馬も太股をせえて氷を割り氷を渡りまハ馬忽
 小凍て冷なき武命を以て小曝し何の益ふあふき能川を越得
 多り共敵小打合事成難く一又帝都より二百六十余丁を隔
 る斯長陣の時日を送るといども帝都より一騎の軍候もあさ
 げふ事如何格不審より先の上意其趣ふ能く只命を全しそ
 勝利とわくこ格事あるも是より引取て数日の長陣苦勞の人

馬と休め春陽氣ふ向て諸勢を進めむ小帝都へ押入て打破る
 一何の子細く有るは各如何と有るは諸大将一同小比類なき
 言葉戦尤と答て各席陣小を極りけふ爰も五日逗留も小知の
 士下り等も山谷よ分入て濫妨し生捕餘多連来るも依て帝の
 の極を穿聞は都ふ大明國より加勢として國王二人来りて六麻
 老爺王として馬上四十万騎の大將一人胡老爺王と云ひ十萬騎の大將あり
 其外將軍判官諸軍兵悉く競い集て王城を守護し日本の軍
 勢を都ふ引交實否と一戦ふ決せんし鋒を磨き抜を極き楯を
 小ぎ物の具小風を引せはけふふと語る諸將上下あふまで是を
 同胸を冷してさるるハ此一説を聞さふは小飛驒も保陳と下

知さくも一幸天晴文武両達の剛将小世祖光武の心根と写し得る人ありとぞ感一けふ

九月十四日诸将チンゼンと立此富有的の地と見て家数十餘万間あり則放火して又各三方に別て洩凍の道ふぞ赴に多一吉

清正チンチンといふ所小着陣と此道十五日全羅道の府中ホラン小岳此道山所古府よりけき在家ニト余あり又少地の山城あり

王城主開退られ城の中宿城を放火を十六日ホキン小陣れ此道十七日カウ小陣を此道十八日チンチン小着此道十九日ホも古城有て

主は十九日山谷を乗出少一き原小押掛る所小北敵七八千出て清正が先手加藤と左衛門尉と合戦一と左衛門尉が組下の

軍兵野合小乗放一置る馬共三千七濫を山谷へ引入れ自慶

尚道の古都小着陣と昔帝都の旧跡をまば家風をたらし

次軒を幸ふ高屋三十餘茶煙ありて大佛殿を建ちてり本堂の柱々五階六階の石の柱ふりて廣き事日本の堂塔壁をきまする

三門のまきと本堂小廻り走りまをよあは次大道の廣き事寺この立根お居の佐根何よ付ても数人目を終るに計り多小

還留しけきバ女日の朝大河内を左衛門尉陣場の末申小當て山中に入此彼を一見一道小踏迷ひ夕日に及て帰りけるは

少路の事るまは夜小入道を見しと何を更小糸なるがま小麓小陣火の影多く見ゆる味方の陣とらぬ火を知り小出らまきとある

柳系りゅうけい敵漫てきまんと陣取居ちんきょいて人馬にんばの食をも不用意ふよういせし真中まんなかの
 下かりける然しかども天運てんうんもや依よらん恙やもく虎口こを遁のがておと朝あさ
 鮮せんの洞ほらをほひひく密ひそに忍しのび通とほりしを去まれども月つきをみし闇やみ
 衆しゆも失うひ味あじ方の陣ちん何なに地ぢもんとたどり来くる如ごとく又また人
 音おと遙とほく岡おかゆ夜よ討うちふも教しるべしと思おもひ能よくはありを岡おかは日
 本人にほんの聲こゑも静しずく立た立た専せん准じゆんと同どう答こたへ曰いはは清きよ正せいの軍ぐん士し成なりが
 昨日きのうの合あ戦せんも馬うまとを無む念ねんに敵てき若わ夜よ討うちふも出でるのとす
 了まて来きてはと答こたへ大河たか内うち伴ばんの敵てき陣ちんを教して曰いはは今いまもはあ見
 ては既すでに小せう炊ひで未な食くせんと見みればさや然しかるとき時とき節せつあり鉄
 炮てつ頻しばしばに打うち掛か俄いつ時ときと上あり無理むりを立たし利りを得え給たまへ某たが

道ち知ちる小せう業ごう月げつせんと言いふと各おの軍ぐん士し未なきに教し小せう逢あては沙さ遣ぢへ
 以も帰かへるに給たまへ供とも申まを若わも奉ほう引ひの方かたと深ふか手を負おせ申まをは
 某たが共とも陣ちん並ならぶ事こと成なり難がたしと祈いのたまは大河たか内うちむと云いふに成
 の刻とき計けいもやうく本ほん陣ちんへ入りて清きよ正せいの軍ぐん兵へい思おもひのまに討うちてま
 一ひと馬うま共とも餘あま多おほく濫らん取と首くび數かず少すくく討うち死し勇ゆう進しんんでは日ひの早はや朝あさ大
 河たか内うち小屋こや各おの一ひと移うつり来きり清きよ正せいより一ひと札しやくの使つかを給たまへりは日
 二ふた日にち大だい佛ぶつ殿でんを先まとて洛らく中ちゆうの在あり家け三さん十じゆ余よの軒けん一ひと字じも残のこさる
 放はな火ひしなれば夜よ中ちゆうも及およぶととも焔あつの光ひかり遠とほ里りまで懸かりて只ただ白
 晝ひるも異いなりんば昔むかし京都きんぎよと立ててコキヤこきやも忘わすれぬ
 此こゝ道ち五ご里り女に五ご日にち夜よ小せう遠とほ雷らいあり日ひ六む日にちシし子こ小せう陣ちん五ご里り此こゝ小せう他た事じ最さい

中の山城あり麓より城まで二里四面の石垣の高サ四間半の
中より爰小三日逗留一城を破果を燒然共城中廣大せ
ふして二百間三百間の米蔵限りるけまば二万三万の勢を
以て廿日三十日小燒尽し難き故小城中心家蔵小火をうけ
其傳小して通りいり廿九日シ子を出て永川小せん
小未き六弓子のサイ山谷合より少敵出て清正が先を破向ひ矢
を射け銃炮を打り終小時を揚々れ清正が先手の
軍兵をを見て餘を討てんと馬の足小任せて上江より
一戦組ひの加藤共左衛門尉止員をさるといども乗散し
る若者共員の音をも聞かざして武略の敵の色見せらるる

實小敗北もるといふ山谷を退入ると山谷間左右の山の狙あり
あが伏をく大敵一度小立より関を揚り指する詰射立打を
うあけ味方働くによも討てきも叶せして難儀小乃西三州
の住人宮地久藏とさりの大久保相換も忠隣が家小立し不意
小立去て清正が幕下小居し本多重左衛門尉と名乗此本多大
音揚て數百の傍輩小なるるといふ方と角一ふ小立細細左右
の敵の的小成て塗るに討死をまきたあは永川表の大場へ乗て
實否の一戦小乃し各はけとちまふ小一ふ小駈出る敵付出るより
組ぞ屋上を上下と返もあり鋒より火端を出して去のぎを刺り鐙
とりの火をどちりしも幾多一言清正一陣小成て數刻打戦ひ敵餘

多討未方も多く討死に彼も多金左衛尉敵一人と切替ひ暫
く我所不龜の甲楯の籠まづふ本多右の多とひか一強して
切けかひ既ふ太刀打付され、等々の敵と組立てたの多めて突
殺息と出て居り、なを本多右衛尉等来て頼と別落一本多
と馬ふ糸せんとも幸多常心のいさる者るも、源を自ふる
右の腕先と踏二三度まで踏切捨んとせ、をひきかきこと門止
め馬ふひきの本陣、川よりぬれ、人本多右衛尉の働と見え、天
晴大剛の兵裁周勃が有控角、角、角と感とる
永川の地形、川面十八九町の大東の山の中とふ物ふ流とある
其北河水の深さるの古股とせ、此大河北の岸より東、西、百餘

町南北三十余町の芝原、て人倫遠、爰ふ一吉清正、陣大川を
後ふあて陣、漸小屋掛せ、知小清正、流石の猛將、うらぐ如何心
臆、久ん大河を打渡、向の岸、小陣と死一吉、是と見て、家中の兵
を召集、多る、あの主計、陣の形、格、あ、何、系、神、を、や、今日、の、合、戦、小
辟易、ま、ま、清、正、上、非、も、不、審、も、根、子、の、河、を、越、え、ば、予、ふ、一、言
の、理、に、有、き、事、に、一、使、を、い、ま、も、越、え、て、来、り、引、越、と、三、事、予
が、分、列、お、能、は、我、の、今日、の、合、戦、場、と、踏、一、川、を、後、ふ、當、て、爰、小、陣、せ
んと、思、ふ、る、り、何、も、如、何、と、有、き、ま、各、畏、て、涉、渡、む、を、主、計、敵、の、法、仕
方、の、失、念、ふ、ふ、神、の、雲、を、踏、か、し、ら、ん、如、び、一、と、申、さ、る、万、死
一、生、の、地、も、危、く、陣、あり、と、云、無、一、吉、猛、ま、名、將、と、は、諸、兵、心

清て近所小大藏の有りと幸と打破り大柵遠柵四重五重
 丈夫分て大筒中筒うけ取一近篝遠篝方ふ焼く敵の寄とゆる
 けり一吉大太を十騎騎来る無恐く破れんと勇け
 る清正をよんで使と越某きりくの一掛りもる原小陣危
 い此方一越ゆる然と云越一吉人ふ勢たはるは小陣はて
 其委細明日申述べと答又清正其部金太史と使とて表角
 一方一陣陣を替らんと有らぬ一吉其部をよむ敵度の内
 使史入満足は去る後小有付は同哉まき由清正申一
 小室を史今晚馬の鞍を何物も物の具を脱てゆくと休息を
 度一飛弾もが討死せはる内其方一敵一人も通まらまきと荒

らら小言々其部ゆと等く清正大川を乗越来て一吉小対面
 小陣中屋の中小屋とまや付て是非は同道はまき由再三詞を
 受て申ける一言答て軍士も苦勞致一柵の下までも付と一
 と空く今更越難い今夜は小一陣まきと有らまき清正は非か
 く小陣小乗ゆりたる一吉が軍兵外はの柵の内は人の居長小穴
 を堀面一人はく穴の中小忍居て若小大筒中筒うけ並て敵を討
 の篝火の光を十餘町向を見とる敵のさかりを聞ぬ不安の
 ごとく夜半過る頃敵羣り来き三方を乗ゆりなると強砲を打
 響一近付ら駈散さんと待けり敵多勢ありと云ともい
 小群易一陣のとお小寄海ぞして夜己ふ平旦ふ及んて敵を山

谷引入ぬ一吉又軍兵小向て今日逗留せんと思ふ何有りと云
 王各承りて能百日成共忠意小促らまらば一夜討ち容易小討ち
 するをこそ答へ角て彼大花を見まは横十四五間堅五六十間小
 て厚サ八九寸の板を以て垣を圍ひ四方まき下小て四口三間半
 戸を立て二尺許の唐土の錠をあらゝかり抑此を先年文徳の
 津征伐小丹波少将秀久御加藤遠江此を以て合戦一日本勢
 数多討死まらば一後其甲冑戈戟鞍籠等小を悉く集三千
 餘人の枯骨體を並べ此倉の内小あり置り石面三尺四方角石
 を地小ゆり立改まらば人形小切て其石小其時の年号目付合戦の
 証を天文字小切付むく爰小清江軍兵蟹江庄藏と云ふのあり

彼が父庄藏小丹波秀久御小仕て此小て討死を彼が指物も長サ五
 尺餘の一の條の葉角木小蟹江庄藏と書付て有り清正の軍
 兵も来て此倉を括りぬ庄藏と父の指物を見付て一悲涙頻小
 流しけるを左るが父小對面の心地とて自小屋上持帰り傍輩
 向て云々父戦死の能を見る事法々ぬまらぬ命を浪りに
 敵を人討て己父が孝養小報せんと主君へ暇を置て悔日の
 夜成の刻汗小立出諸人色々制しまらば嘗て思ひ止むるて
 大川を打渡りまらばぬ谷のどり行志と哀まらり
 かりける如小日比近く通せ傍輩二人見ぬ一難くおのひ
 けん馬を早めて乗續るる庄藏を見まらば何なる事